

聖書宣教会通信

東京都羽村市羽西 2-9-3 Tel:042(554)1710 Fax:042(554)5562 www.bibleseminary.jp 振替 00150-6-34971

巻頭言

「『驚き』の連続の中で」

(横浜山手キリスト教会牧師、聖書神学舎教師) 三浦

議

今から五年前の秋、聖書神学舎の後期の授業が始まる日、私は新たな思いで神学舎の門をくぐりました。神学舎で教えさせていただき最初の日でした。その時、二十数年前に学生として初めて神学舎の門をくぐった日のことを思い起こしました。浜田山にあった学舎。その門の前の道を何度も行き来しながら「学校」なるものを探すのですが、見つかりません。やっと目の前にある木造の建物がそうだとわかりました。窓のすりガラスのひび割れがセロテープで貼られていました。「ええー？ここ？」ある種の「驚き」でした。しかし、神学舎は、私に自身が立つべき神学の基礎を与え、信仰者としての歩む姿勢を真っ向から問い直してくれました。「こんな者を神様は召されたのだ」という「驚き」を確認しました。

その後、十数年の四国での牧会。そして再度学ぶ機会が与えられるのですが、その時に神学舎での教鞭などということはこれっぽっちも考えていませんでした。ところが、こんなことに…。この「驚き」をもって、五年前に再度神学舎の門をくぐることになります。しかし、この「驚き」は今もなくなりません。

卒業してから二十数年が経っていたということもあるのでしょうか。少しずつ神学舎の中にいる自分というものを取り戻してきたように感じます。教えさせていただきながらの学びです。しかし、最近、神様はこんなことを通して、誰よりもまず私自身を整えてくださるのかなと感じます。ポストモダンという時代も関係しているのでしょうか。神学舎を出た後も学びが続く中で、しかし今の聖書解釈があまりにも煩雑すぎて私自身整理ができていない時に、かえってこの神学舎に送られて、そこら辺りのことが整理されてきたようにも思います。私自身がまずは原点に帰らされているのかもしれません。

先日、奈良で行われた日本福音主義神学舎の全国神学研究会議に出席してきました。

「福音主義神学、その行くべき方向-聖書信仰と福音主義神学の未来-」がテーマです。これまでの自由主義神学に対する福音主義神学の立ち位置はまだわかりやすかったのですが、

ポストモダンを迎えた今、「福音主義とは何なのか」が問われる時代となりました。ますます厄介です。会議の中で、「ええー？今はそんな時代？」と、またも私はある種の「驚き」を覚えます。もしかしたら、これまで神学舎が発信し続けてきたことがまたも必要な時になったのかもしれない。

私自身にもいろいろな「驚き」がまだまだ続きます。でも、皆さんと確認させていただきたいことは、共に、何よりも自身に対する神の恵みには最後まで「驚き」を持ち続けていたいということです。「使徒の中では最も小さい者」(1コリント 15:9)と告白したパウロは、後に「すべての聖徒たちのうちで一番小さな私」(エペソ 3:8)と告白します。そして最後に、「罪人のかしら」(1テモテ 1:15)と告白します。しかし、その時、こう言います。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた』ということばはまことであり…。」「下へ」というキリストの受肉の方向性と、パウロが年齢と経験を重ねるごとの自身の告白の方向性が似通っています。

パウロはこうも語ります。「しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが、今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容を示してくださったからです」(1テモテ 1:16)。お互いどこに置かれていようとも、最後まで神の恵みに「驚き」つつ、あわれみの見本として、ただただ誤りなき神のことばにより頼む私たちでありたいと思います。



聖書神学舎を支えてくださっている諸教会の皆様へ

羽村では、宮ノ下グラウンドの芝生が一面白い霜で覆われ、一足飛びで冬景色に移り変わろうとしています。秋の諸活動を終え、教会の皆様はいかがお過ごしでしょうか。再び聖書宣教会から秋の近況をお伝えいたします。

●近況

前期が10月16日に終了し、短い調整期間を挟んで、後期の授業が10月30日から始まりしました。調整期間中には例年リトリートがあり、その開始に先立って十数名が高水三山を目指して“縦走”(!)をしました。頂上での見晴らしはすばらしく、しばし疲れを忘れさせてくれます。今年のリトリートでは赤坂先生を講師に「牧会者の苦悩と失敗」について共に考える機会を持ちました。何はともあれ、毎年息抜きと交わりの良い機会となっています。その後、予定通り後期が開始され、今は研修生一同大過なく日々の学びに励んでいます。卒業を控えた研修生は、卒論・卒研に取り組みつつ、いよいよ将来の奉仕への具体的な導きを求めて行かなければなりません。すでに決まった者もありますが、多くは祈りの中です。それぞれがふさわしい奉仕先へ導かれて行くようにお祈りください。

後期が始まって間もなく(11月8日)オープン・デイを迎えました。来訪者は昨年より多く、49名でした。来年度、具体的に入会を考えている数名の方々と面談ができたのは感謝でした。ボランティアによる働きも続けられ、中庭の木蓮やこぶしの木ばかりではなく、裏にある檜の木も剪定をしていただき本当に助かりました。また前回の「通信」の発送時には、外部から五名の方々が手伝いに駆けつけてくださいましたが、今回の発送も期待しています。発送作業日の12月9日は、聖書宣教会のクリスマス会でもあります。これまで、奥多摩福音の家のご好意でクリスマス会を盛大に祝ってきましたが、研修生活の簡素化の一環として、今年は自前でクリスマス会を行うことになりました。これまで奥多摩福音の家の多大なご好意については、ただただ感謝するのみです。その他、11月20日には野田秀先生を迎えての祈りの日、29日は賛美礼拝。

そして12月13日からクリスマス調整期間となります。

●福音主義の動向

巻頭言の三浦先生も触れていますように、11月4日から6日まで日本福音主義神学会の「全国研究会議」が、関西聖書学院で開かれました。テーマは「福音主義神学、その行くべき方向」でした。「福音主義神学の聖書釈義」についての発題を担当した津村師を始め、聖書宣教会からは赤坂師、三浦師、そして研修生三名が参加しました。直接経験していない私にはその場の雰囲気をお伝えすることはできませんが、参加された方々の報告、発題者の原稿やレジュメ(ネットで入手可)を読みながら、日本の福音主義もどんどん多方面に拡散している現実を覚えます。聖書の無誤性を離れ、知らぬ間にポストモダンの発想をして、聖書のテキストを原著者の意図に限定することはせず、多様な読みを容認するようになってきているように思われます。それはとりもなおさず、その根底にある聖書の靈感そのものが問われていることを意味します。そうであれば、苦勞して原語に取り組み「唯一の意味」を追究する努力は軽視され、それぞれの立場からの読みが提供されてしまいます。それはそのまま福音主義の拡散に繋がって行くのではないのでしょうか。そればかりかこのことが信仰の一致を脅かすことにならないかと案じられます。私たちも目を開いてそのような危険を意識していかなければならない時代に立っています。

●祈禱課題

(1) 来年度の入会者のためにお祈りください。現在願書を取り寄せている方は十数名おりますが、最終的に何名が願書を提出するかは、毎年直前になるまで分かりません。入会を考えている方々に確かな主の導きが与えられるように。

(2) 聖書翻訳に多くの先生方が協力しています。2016年度完成を目指す聖書翻訳事業のために先生方の貴重な奉仕が用いられるようにお祈りください。

この通信がお手元に届く頃は、諸教会にてクリスマスの諸準備の真っ最中かと思えます。良いクリスマスをお迎えください。

～リトリートの報告と感謝～

担当係：田中 秀亮 ひで あき

聖書宣教会では、毎年、秋の調整期間に一泊二日のリトリートを行なっています。研修生の他、研修生の家族、先生方が参加します。今年は10月21日～22日に奥多摩福音の家で行いました。全部で36名（うち研修生は18名）の参加者でした。毎年、リトリートのテーマを立てるのですが、今年は「牧会者の苦悩と失敗」としました。まだ牧師や伝道者として牧会の現場に遣わされているわけではありませんが、神学生のうちからこのような課題を意識し、自分自身のあり方を吟味することは意義があると考えて、以上のテーマを掲げました。

今回は聖書研究とメッセージからみことばの学びをもちました。民数記11章と20章から、イスラエルの民を導く指導者モーセの姿に焦点を当て、自分たちで聖書研究のテキストを作成しました。これまで宣教会ではグループ聖書研究をする機会はほとんどありませんでしたので、期待と不安の両方がありました。しかし、終わってみ

れば、みことばを深く味わう時となりました。アンケートの結果からも、肯定的な反応が多かったです。個人的な感想ですが、20章の民の不平（水の問題）に対するモーセとアロンの行動が、「わたしを信ぜず、わたしをイスラエルの人々の前に聖なる者としなかった」と言われたことから、「踏み込んでほしくない領域」「冒してほしくない権威」「人が為すべき分」ということを考えさせられました。

リトリートは1泊2日、正味24時間もない集いです。それも毎日顔を合わせている方々との交わりです。それでも普段とは違う場所に行き、普段とは少し違うことをしたりする中で、お互いの新しい面に気づいたり、交わりが深められることもありました。

みことばの前に静まり、また、互いを知り合う機会として今年のリトリートをもつことができたことを主に感謝いたします。

～リトリートのメッセージから～

赤坂 泉

テーマを承けて、「主のくださる回復と喜び」について、ペテロに注目してみことばを学びました。周囲からの役割期待や肥大化した自己意識に煽られるようにして、出しゃばり、背負い込み、そうして自ら苦悩を招き入れる伝道者の失敗を、モーセにもペテロにも見ることができます。そんな愚かな者をなお御前に立たせ、悔い改めと新たな信頼へと至らせ、回復を与えてくださる主に感謝します。ペテロは、十字架直前になっても相変わらず「この中でだれが一番偉いだろうという論議」を止められない、未熟で無理解な弟子たちの筆頭にいます。麦のようにふるいにかけて吹き飛ばされる経験もします。自分に関心を向け過ぎ、周りの人のことが気になり過ぎて、主から目を離してしまうとき、失敗し、苦悩するのです。しかし、主のあわれみの眼差し、とりなし、方向づけに支えられて回復をいただき、兄弟たちを力づける奉仕に邁進するようになりました。ペンテコステ後のペテロの奉仕の力強さには、目を見張る思

いがします。聖霊の恵みに感謝します。

それでも彼は失敗を重ねます。使徒10章で主の鮮やかなお取り扱ひを受けて、異邦人の救いを確信したのに、ガラテヤ2章（使徒14章の頃）によれば、人を恐れて異邦人への態度に一貫性を欠き、パウロの非難と抗議を受けます。またしても主から目を離して失敗しているのです。主にある兄弟の矯正に助けられて、回復を得、そうして後、使徒15章の「エルサレム会議」では筋の通った重要な決議を導くことができました。こうした経験が、ペテロの手紙に見る共感的な伝道牧会の姿勢にもつながっているのだと考えられます。

私たちは、苦悩と失敗のとき、その現実を、ごまかすことなく謙虚に直視したいと思えます。そこで視線を主に向け直したいのです。主ご自身の介入と兄弟的な矯正とにあずかるとき、それを大切に受け止め、回復と喜びへと導いていただいて、一層力強く主に仕えてまいりたいと思えます。

「図書館から」

図書館長 津村 俊夫

夏に、一週間、ベルギーに行く機会が与えられ、忙しい聖書翻訳からしばし離れて、ルーヴァン大学で持たれたサムエル記の国際学会に参加いたしました。今年は、丁度、第一次世界大戦勃発の 100 周年の年にあたり、欧州各地で記念式典が持たれました。その大学町のいくつかの建物でも特別展示が行われていました。その中で特に目を引いたのが、ルーヴァン大学の図書館の蔵書がドイツ兵によって運び去られ、また多くの書籍が焼却されている光景を撮った写真でした。何十万冊という本が無残にも瞬く間に灰燼に帰したのです。戦後、アメリカでその図書館の復旧のための拠金が行われて再び図書館が再建されたとのことでした。

なぜ、図書館の蔵書をそこまでして？と思いました。空爆や誤爆のせいで図書館が犠牲になったというのではありません。図書館に押し入って、意図的に、貴重な蔵書を持ち出し、残りを焼却したのです。日本軍も、中国に侵略した際に、貴重な書物を相当数略奪し持ち帰ったということをご存知の方が多いと思います。シリアやイラクでは、今も、博物館の略奪が続いて、多くの遺跡が破壊され、遺物がブラック・マーケットに出回っています。

人類の文化遺産が、かくも無残に破壊され、焼却された（粘土板文書は、火の中をくぐり抜けて何千年も後まで残されてきましたが）ことに思いを馳せる時、本当に悲しくなります。と同時に、人間の罪深さと愚かさを、そして貪欲さを思わざるを得ません。

宣教会の図書館の蔵書がいつまで保たれ、用いられていくのか、分かりません。分かっていることは、本の果たす使命は、しばしば人間の寿命を遥かに超えて、後々までの時代に益するものとなり得ると言うことです。一冊の本の重みを実感しつつ、大事に用いていきたいと思えます。

《近況と祈りの課題》

- 後期は、19 名の研修生／特別研修生、14 名の聴講生がともに学び、拡大教育でも 34 名の受講者が学んでいます。それぞれが、主の目にかなう学びを得られるようお祈りください。
- 講師陣では、遠藤おる先生がクラス担当に復帰、山中直義先生がギリシャ語（中級）を新たに担当、といった嬉しい変化があり、主に感謝しています。母国で闘病中の蔡先生ほか、教師、講師の健康その他の必要を主が満たして下さるようにお祈りください。
- 毎日のチャペルでは、教師・講師のほかにも外来の説教者をお迎えしたり、理事、評議員に奉仕していただいたりして、礼拝をささげています。年明けからは卒業予定者による説教も始まります。一同の霊的な整えが祝されるようにお祈りください。
- 経済的な面でも、この学舎の働きを教会のわざとして覚えて祈り、支えて下さる諸教会、主の民によって、いつも必要が満たされてきたことを主に感謝しています。今年度も厳しい局面が続きますが、主に信頼して歩みを進めております。お祈りを感謝します。

《ボランティアの感謝とお願い》

主にある兄弟姉妹のご援助を感謝しています。〈庭と植木の管理（随時）〉、〈通信発送作業（次回 3 月 3 日）〉のほか、特別な賜物や関心をもってお手伝い下さることがあれば是非ご連絡ください。授業日であれば、朝 10:05 からのチャペルでの礼拝や、12:30 からの昼食の交わりにもご参加いただけます。予約をいただければ昼食は提供させていただきます。ご連絡、お問い合わせは電話、FAX またはウェブサイトの「お問い合わせ」からのメールをお願いします。

編集後記

今号をお届けする頃、日本は国政選挙戦の最中です。世界の情勢も、ほんの数週間先のことでも予断を許しません。神学界の潮流にも変化が続きます。みことばに堅く立って動かされる

ことなく、祈りを教えられ、言動を整えられて、主に仕えたいものです。「主よ。あわれんでください。」(A)